

疾患研究に、誰の視点をどう取り込むか？

- 英国の取り組み事例とその背景 -

2012年5月7日（月） 18:00-20:00

研究対象となる人々の意見や視点を、疾患研究の企画・遂行過程に取り入れること、そして産出された知見の貢献度を高めることが重視されはじめています。

先進的な取り組みを行っているとして言及されることの多い英国では、研究プロジェクトの企画や実施に際して、実際に、どのように「当事者への貢献度を高める」作業が行われているのでしょうか？また、その過程にはどのような苦労やサポートがあるのでしょうか？英国で見てきたことの一部をご紹介します、共有できれば幸いです。（系統だった調査結果の発表ではないのでご注意ください）（ゲストより）

ゲスト 東島 仁 氏 日本学術振興会特別研究員（大阪大学）

2011年10月から4ヶ月間、英国議会科学技術局に滞在し、テクノロジーアセスメント、自閉症研究と政策担当者・自閉症者をはじめとする市民の関係、疾患研究における当事者の巻き込みなどを調査してきました。もともと脳やら行動の研究をしていたつもりが、いつの間にか科学と社会の関係について考えるようになり、そうこうしているうちに生命倫理や科学コミュニケーション、研究倫理のような領域が「専門」になっていました。主な研究テーマは自閉症あるいは広汎性発達障害です。

会場 京都大学 吉田泉殿

- *京町家風の建物です。
- *普通の家のように見えるので、通り過ぎないようにご注意ください。
- *入り口に「京都大学吉田泉殿」という看板がかかっています。

定員 25名程度

- *当日参加も可能です！
- *お申し込みをいただいた方には、リマインダーをお送ります。

持ち物 （おなががすく時間なので）
夕ご飯をご持参ください。

主催 科学コミュニケーション研究会 関西支部有志
水町 衣里（京都大学）、加納圭（滋賀大学）



お申し込みはコチラから → <http://bit.ly/llbm9g>